

## 素材と他者に着目した乳児期の感触あそびの検討

山田真世 (教育学部)

## 問題

乳児の認知能力が明らかになる中で、0～2 歳児を能動的な学習者として捉え、0～2 歳児が文化に参加し、豊かな学びを経験するための環境を作ることには保育における喫緊の課題となっている。特に、0～2 歳の保育で行われる「感触あそび」は、水や砂、新聞紙、小麦粉、片栗粉など幅広い素材を用いて、子どもの視覚や聴覚、皮膚感覚、運動感覚に働きかける遊びである。

感触遊びに関する先行研究においては、子どもは素材の特徴や意味を知るだけでなく身体についての理解も深めていくこと(無藤, 2012)、また、子ども同士のイメージの共有がなされていること(箕輪, 2006; 2011)が指摘されている。そのため、感触あそびという文化的行為に参入する過程で、子どもたちは素材だけでなく、自分や他者についての理解も深めていることが考えられる。

近年では、幼児期の感触あそびについての研究や様々な感触あそびの実践が報告されている(ex., 山下, 2020)ものの、乳児期の保育で実際に行われている感触あそびについて体系的な整理はされておらず、あそびの中で素材を媒介に他者とのようなコミュニケーションが生じているかについても実証的な研究が必要とされている。

そこで、本研究は、手指の発達により道具使用が可能となった1歳児クラスの子どものたちの感触あそびに着目し、以下の2つの研究目的を設定し、研究を行う。目的1として、0～2クラスの感触あそびにおける素材やねらいを明らかにするため、実践事例を分析し、検討する。目的2として、1歳児の素材への関わり方、他者とのコミュニケーションを明らかにするため、1歳児クラスの感触あそびについて保育場面の観察を行う。

本研究について、具体的な内容は論文等での公表を予定しているため、以下概要を示す。

## 方法

## 目的1

実践事例の分析では、2015年から2024年の10年間に発行された『季刊保育問題研究』(全国保育問題研究連絡協議会機関紙)の提案号において、0歳児クラス、1歳児クラス、2歳児クラスの感触あそびについて言及のある実践を分析対象とした。

実践事例の分析観点は、年齢、素材、遊びの中での子どもの姿、保育のねらい等であった。

## 目的2

1歳児クラスの感触あそびについて、X県の保育所1歳児クラスにおける日常的な保育場面の観察を行った。

本観察場面は、泥を使った感触あそびであった。観察観点は、子どもの素材へのかかわり方、遊びの中で他者(他児・保育者)に向けた行為や発話、相互行為であり、現在分析中である。

## 引用文献

箕輪潤子. (2006). 幼児同士の砂遊びの特徴—ガーヴェイのごっこ遊び理論を手がかりとして—. 保育学研究, 44(2), 178-188.

箕輪潤子. (2011). 砂場遊びに関する研究動向と今後の展望. 川村学園女子大学研究紀要, 22(1), 197-204.

無藤隆. (2012). 保育実践と保育環境. 保育学研究, 50(3), 238-241.

山下慶子. (2020). 五感をはぐくむ感触あそび! 人やものと友だちになろう. かもがわ出版.